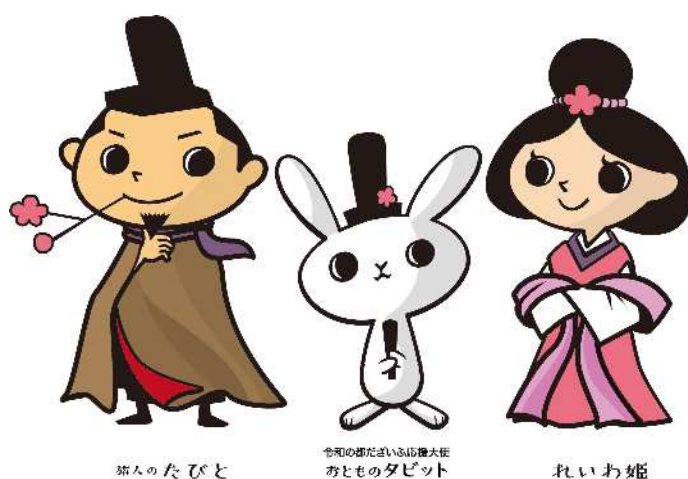


令和 6 年度 人権作品入選作文集



太宰府市教育委員会

じんけんさくぶんにゆうせんさくひん
人権作文入選作品（小学生の部）

「しょうがい」をなくしましょう

しょうがつこうさんねん ひろせ
小学校三年 廣瀬 紗良……2

「へいわとせんそう」を読んで

しょうがつこうさんねん ひらの
小学校三年 平野 玲奈……3

あいて き かんが
相手の気持ちを考えて

しょうがつこうよねん たけむら
小学校四年 竹村 雪姫……4

だい
大じょうぶ

しょうがつこうよねん おおやま
小学校四年 大山 葵翔……5

へいわこうしん さんか
平和行進に参加して

しょうがつこうごねん きくたけ
小学校五年 菊武 萌愛……6

おも ひごと
思いやりの一言

しょうがつこうごねん どうぞの
小学校五年 堂蘭 結心……7

で あ
おっちゃんとの出会い

しょうがつこうごねん なかまつ
小学校五年 仲松 盾人……8

まな
パラスポーツから学んだこと

しょうがつこうろくねん おわた
小学校六年 大田 千尋……9

ことば たいせつ
言葉を大切に

しょうがつこうろくねん くさかべ
小学校六年 日下部 琴美……10

ことば ことば
「言葉」「言刃」

しょうがつこうろくねん きした
小学校六年 木下 つむぎ……11

じんけんさくぶんにゆうせんさくひん
人権作文入選作品（中学生の部）

いのち

命をつなぐメッセージリレー

ちゅうがつこういちねん うえた
中学校一年 上田 慎士……14

ことば み はもの
言葉は見えない刃物

ちゅうがつこういちねん えがみ
中学校一年 江上 里桜……15

ひび せいかつ
日々の生活

ちゅうがつこうにねん しのぎき
中学校二年 篠崎 理心……17

しょう
障がいをもついてもみんな同じ人間

ちゅうがつこうにねん かわぐち
中学校二年 川口 莉愛……18

たようせい
多様性

ちゅうがつこうさんねん ひらかわ
中学校三年 平川 千珠……19

人権作文入選作品

（小学生の部）

「しょうがい」をなくしましょう

しょうがっこうさんねん ひろせ 紗良
小学校三年 廣瀬 紗良

わたしは、三年生さんねんせいになって「しょうがい」という言葉ことばの正しい意味いみをはじめて知りました。小さいころは、何も知らなかったのなで、「目めが見えない『しょうがい』はへんだな。」と思っていました。だけどこのじゆぎじゆぎようで正しく教おしえてもらってこれまでの考えかんがは、まちがっていたんだと気づききました。

じゆぎじゆぎようの中で「しょうがい」はその本人ほんにんにあるものではなく、まわりのかんきかんきようやつめたい人の心こころが作り出すものだと学まなびました。だから体からだがふじゆうなことも周まわりの人のかかわり方かたしだいでしょうがいではなく、その人ひとのとくちようやこせいになるんだと思おもいました。

わたしは、このまえ、ショッピングモールで車くるまいすにのっている人ひとを見かけました。そして、そのうしろには、車くるまいすをおおしている人ひともいっしょにいました。車くるまいすの人ひとが一人だと、だんさがあつたときに一人ではいどうできません。だけど、おしてくれる人ひとがいるとだんさがあつてもいどうすることができます。わたしは、車くるまいすをおおす人ひとを見て、この人ひとが車くるまいすの人ひとの「しょうがい」をなくしているんだと思おもいました。耳みみがきこえない人ひと

は、手話しゅわ、足あしがふじゆうな人は車くるまいす、目めが見えない人は白はくじようをつかつて生活せいかつすることで「しょうがい」はなくすことができます。

学習がくしゅうする前は「しょうがいってへんだ」と思おもっていたけれど、今は、ぜんぜんへんじやないし、なくせるものだと思おもっています。だから、これから昔むかしのわたしのようにならなかつた使つかい方かたをしている人ひとがいたら正しい「しょうがい」の意味いみをつたえてちゆういしていきたいと思おもいます。みんなの「しょうがい」をなくせるようにわたしが学まなんだことを広ひろめていきたいと思おもいます。みなさんも正しい意味いみを知しっていっしょに世界せかいから「しょうがい」をなくしましょう。

「へいわとせんそう」を読んで

しょうがつにうさぎねん
小学校三年 平野 玲奈

わたしは、道とくで「火の海をにげて」を学習して、せんそうや平和のことにきょうみを持ったので、この本を読みました。この本は、「へいわのかぞく」と「せんそうのかぞく」、「へいわのどうぐ」と「せんそうのどうぐ」など、平和な生活をしている時と、せんそうがあっている時の様子が、わかりやすい絵と言葉でくらべられるようになっています。

この本に出てくるのは、ボクとその家族です。平和の時のボクは、えがおで元気にすごしています。でも、せんそうの時のボクは、とてもこわそうにしてしやがみこんでいます。また、平和の時の家族は、みんなでごはんを食べていますが、せんそうの時は、おちついてごはんを食べることがほとんどできません。

わたしがこの本を読んで一番心にのこったところは、お父さんとお母さんが出てくることです。平和な時のお父さんは、ボクといっしょに遊んでいます。せんそうの時のお父さんは、ぶきを持って国のためにたたかおうとしています。平和な時のお母さんは、ボクに絵本を読んでくれますが、せんそうの時の

お母さんは、ボクをひつしで守ろうとしています。わたしは、この部分を読んで、もしわたしがボクと同じような立場だったら、ものすごくこわいだろうと思います。

せんそうのために、大切な家族のえがおがなくなってしまうのは、すごくいやだなとも思いました。

わたしは、この本を読んで、せんそうはやってはいけないことを学びました。最後のほうの場面で、「みかたのあき」と「てきのあき」という言葉と、てきもみかたも同じ朝日を見ているところが書かれています。わたしが見ている朝を、せんそうで苦しんでいる人も見ているかもしれないと思うと、とてもかなしい気持ちになりました。せんそうがない平和な世界になってほしいと思いました。

相手の気持ちも考えて

しょうがつこうよねん
小学校四年 竹村 雪姫

わたしは、いけないことをしている人を強く注意していません。強く注意しないといけないことをした人がはんせいしなないと思っていたからです。だから、わたしが注意した人とは、その後、あまりなかよくなれなかったこともたくさんありました。

ある日、またいけないことをしている人を見て、強く注意しているとそばにいた友だちがわたしに

「そんなに強くおこったらだめだよ。」

と言いました。わたしは、ただ注意しているだけなのになと思いました。

次の日、友だちがいけないことをしている人に注意をしていました。その友だちをしばらく見ていると、その友だちは、やさしい声でやったらいけない理由を伝えてから、

「もう、やらないでね。」

と言っていました。そうすると、いけないことをしていた友だちの顔はとてもおだやかで、その時、わたしは自分の注意のし方のまちがいに気づきました。それは、相手の気持ちになって注意できていなかったということです。強く注意すると、相手はきずつ

いてしまいます。だけど、わたしの友だちは、相手の気持ちを考えて、やさしく注意していました。

わたしは、「思いやり」の気持ちがたりなかったのではないかなと思いました。注意は、相手をきずつけるためにするのではなく、相手のことを思っていることなので、言葉や言い方を考えることが大切だと気づきました。いけないことをしている人にも、何か理由があつて、そのようなことをやってしまったのかもしれない。その理由をきくことも大切だと思います。これからは、相手の気持ちを考えてやさしく注意していこうと思いました。

その後、わたしは、少しかもしれないけど変わったような気がします。やさしく注意すると、相手もわたしの話をよく聞いてくれました。また、わたしが友だちから注意された時は、「ありがとう」と注意してくれた友だちにかんしゃできるようになりました。東っ子思いやり算の中にも、「声をかけると笑顔になる」というものがあります。わたしは、これから、「やさしく注意は、思いやり」だということを考えて、やさしく友だちに声をかける人になりたいです。そして、東小のみんなを笑顔にできる人になりたいです。

だい 大じょうぶ

しょうがっこう よねん おおやま あいと
小学校四年 大山 葵翔

ぼくには、ばあちゃんがあります。ばあちゃんとじいちゃんとママとパパとねこのあずきの五人と一ぴきでくらしています。

ばあちゃんは、六十三歳でまだまだわかいです。昔は体を動かすことがとく意で、しょうがいぶつりレーが速かったそうです。だからばあちゃんになってからも、自転車でぼくをようち園まで毎日送ってくれていました。ほかに料理がとくいでオムライスとオムレツは世界一おいしいです。ばあちゃんのおかげで病氣しない体になりました。

ばあちゃんとはいろいろな所へ旅行に行きました。一番遠くは沖縄です。沖縄へは飛行機で行きました。飛行機に乗るときはあちゃんは不安そうでした。ばあちゃんにもこわいものがあるんだなあと思いました。

そんなばあちゃんがぼくは大好きです。パパやママがいそがしくてもきみしくないのはばあちゃんのおかげです。ばあちゃんがよくぼくに言ってくれる言葉があります。「大じょうぶ」という言葉です。ぼくは、その一言でたくさんすくわれてきました。ぼくが給食で苦手なメニューがあるときに「大じょうぶ。む

りしなくていいんだよ。」

とやさしく言ってくれます。習い事の水泳のテストがある日も「大じょうぶ。合かくしなくてもいいんだよ。」とはげましてくれます。ばあちゃんのその一言のおかげでつらいことのりこえてきました。「大じょうぶ」は、ぼくのお守りです。

人が人を助けるための方法はたくさんありますが、ぼくは「言葉」が一番人をすくえる方法だと思います。言ってもらえばかりではなく、ぼくはいろいろな人に「大じょうぶ」という言葉をかけるようにしています。伝える相手は、なやんでいる友達、こまっている一年生、仕事でつかれているパパやママとさまざまですが、ぼくの「大じょうぶ」の一言で、みんながほっとした表情になってくれることがとてもうれしいです。それだけでなく、みんなが「ありがとう」の言葉をかえしてくれます。相手をはげましたつもりが、ぎやくにぼくも元氣をもらいます。

こんなにすてきな言葉のやりとりがあるのに、言葉で人をきずつけたり、悲しませたりしてしまうニュースを見ます。だから、言葉を言うときにはよく考えて、自分の言葉にせきにんを持つ必要があると思います。

ぼくは、自分をすくってくれた「大じょうぶ」の力で、ばあちゃんをすくったり、周りの人をすくったりして、みんながうれしい気持ちになる世の中にしていきたいです。

へいわこうしん さんか 平和行進に参加して

しょうがっこうごねん きくたけ めあ
小学校五年 菊武 萌愛

わたし なつやす おこな
私は、夏休みに行われている筑紫地区平和行進に毎年参加しています。平和行進とは、平和の大切さや戦争の恐ろしさを、みんなにうつたえるために行っています。しかし、最近は暑さのために、行進がでぎずに、みんなが集まって集会があつています。

ことし しちがつさんじゅうにち
今年も、七月三十日にパープルプラザで平和行動が行われました。会場になつているさんあいホールには、たくさんの人が集まっています。わたしのこ かい へいわ
私たちの子ども会も平和アピールをしました。アピールでは、学校であつた平和学習のことや子ども会で学習したこと、かんが った わたし なつやす
考えたことを伝えました。私は、夏休みにも子ども会で学習したことについて、次のようなことを発表しました。

なつやす
「夏休みに、『犬やねこが消えた』という本の話を読みました。戦争中、かつていた犬やねこは国に取り上げられて殺されたそうです。殺された犬やねこは、毛皮にされ戦争に使われたそうです。人間がしている戦争に、犬やねこがまきこまれて、命をうばわれていったそうです。かつていた人の気もちを考えると、悲しくなります。私は今、家で犬を二匹かっています。この二匹の犬は、私にとって家族と同じくらい大切です。もし、同じようなこ

わたし ぜったい ゆる
とをされたら、私は絶対に許しません。そのようなことになる戦争を私は絶対に許しません。」

とアピールしました。

ほかにも、ステージでは、高校生平和大使の人のアピールもありました。私は、アピールのために原こうを書いて、読んでいきましたが、高校生の人たちは、ステージに立つて自分の考えをその場で発表していて、すごいと思いました。

いま せかい お
今も世界では、いくつもの戦争が起きています。国と国のけんかたいせつ いのち
で大切な命がなくなることや小さな子どもまで命がうばわれることは、絶対におかしいです。「戦争をなくしたい」と思うだけでは、いけません。行動しなければいけません。その考えを人に伝えなければなりません。今、自分たちが生きていることを大切にして、みんなが楽しく生きていけるようにしなくては いけません。平和であり続けるために、世界中の人が一日一日を笑顔ですごして、命を大切にできるように相手の気もちを考えたり、自分の思いを伝えたりしていくことを大切にしていきます。

せんそう へいわ さべつ
これからも、戦争や平和のこと、差別のことについて、正しく学んで自分の考えをたくさんの人に伝えていきたいです。

思いやりの一言

小学校五年 堂蘭 結心

ぼくは、人とつながる言葉には色々あると思います。声をかける自分も相手も周りもあたたかい気持ちになる、そんな思いやりの一言は人と人をつなげると思います。

ぼくは、四年生の夏休みが終わってすぐに、国分小学校に転入しました。とてもきんちようしていました。知らない人と話すのがはずかしい気持ちでいっぱいでした。転入して数日、ぼくはずっときんちようしていて、一人でいる時間が多くありました。ある時、クラスメイトの一人が声をかけてくれました。ぼくもその子も野球が好きなので、野球の話で盛り上がりました。とても楽しかったし、うれしかったです。それをきっかけに、自分からも話しかけることにしました。すると、少しずつ友だちが増えていきました。

今年の一月から、ぼくは地域の野球チームに入りました。何度かチームの体験会や見学に行こうとしましたが、きんちようしすぎて体が固まってしまつて、なかなかグラウンドに入ることができませんでした。その時に数人の友だちが、

「一緒に野球しよう」

と、声をかけてくれました。うれしかったです。その一言で、グラウ

ンドに入る勇気が出て練習に参加することができました。思いやりの一言で人の気持ちは動くことを実感しました。練習や試合でも、「ナイスプレー。」「お前ならでできるぞ。」などチームのみんなと大きな声を出して声をかけ合います。すると、チームの空気がぐつとよくなります。一言でもその力はとても大きいです。ぼくも、積極的に声を出してチームを盛り上げていきたいです。

今年の三月、ぼくに妹ができました。とてもかわいいです。近所の人たちも「赤ちゃんの泣き声がかわいいね。」「この地域が明るくなつてうれしいね。」「また大きくなったね。」「妹の成長を喜んでくれます。赤ちゃんと一緒にいると友だちや通りがかりの知らない人まで「かわいい」と声をかけてくれてうれしい気持ちになります。赤ちゃんが泣いていてもお店の人も「赤ちゃんは泣くのが仕事だから気にしないでいいよ。」「優しい声をかけてくれます。お母さんはほつとしている様子でした。

ぼくは、きんちようしやすい性格です。ぼくだけでなく、周りにも困っていたり不安に思ったりしている人はたくさんいると思います。そんな時は、お互いに少し勇気を出して、思いやりの一言の声をかければ、みんながあたたかい気持ちになると思います。まずは、相手の気持ちを考えて、ぼくも少しの勇気と優しい気持ちをもつて、声をかけていきたいです。そして、人とのつながりを大切にしていきたいです。

おっちゃんとの出会い であ

しょうがつこうごねん なかまつ じゅんと
小学校五年 仲松 盾人

ぼくが三年生の時、地いきの紙ヒコーキ大会で、ふじたさんという人に出会いました。

ふじたさんは、八十才近くで、二十年以上も国分アンビシヤス広場で和ごまやいごなど昔ながらの遊びの楽しさを子どもたちに伝えるために活動している方です。

国分アンビシヤス広場では、一年生から六年生まで年れいに関係なく遊べることで、ゲームやスマホでは味わえない体験をすることができず。

ふじたさんは、一人ひとりにしんけんに、和ごまやいごを教えてください。ぼくが、友だちとふざけていると、大きな声でしかられてしまいます。ふじたさんは、怒るととてもこわいけれど、子どもたちのことを思いやってくれる心の優しい人です。だから、みんなから、「おっちゃん、おっちゃん」とよばれて、したわれています。

おっちゃんがこのような活動を二十年以上も続ける理由は、

「今の子どもたちは、ゲームばかりで遊んでおり、友だちと外で遊ぶ楽しさや何かを成しとげる喜びが忘れられていることが悲しいからだ。」

と父から聞きました。

ぼくも、新型コロナウイルスが流行していて、あまり外に出られなかった時は、ゲームで遊ぶ日が多かったです。しかし、おっちゃんとお会って、和ごまを教えてもらったことをきっかけに、外で友だちと遊ぶ楽しさを学びました。ぼくは、おっちゃんにたくさん怒られながらも、和ごまが上達するように、一生けん命がんばりました。今では、「ちびっ子指どう員試験」にも合格することができました。ぼくもおっちゃんのように、低学年の友だちに和ごまを教えていて、和ごまを回せるようになる喜びを伝えていきます。

最近、おっちゃんがアンビシヤス広場に来ることが少なくなりました。あんなに元気なおっちゃんが体調不良になることが増えたそうです。

「わしも歳には、かなわん。」

と話していたのを聞いて、ぼくはなんだかさみしくなりました。

ぼくは、昔ながらの遊びを経験することで、ぼくたちの個性や能力を伸ばしてくれるおっちゃんと国分アンビシヤス広場が大好きです。おっちゃんが元氣なまがきり、たくさんの人に、国分アンビシヤス広場のみりよくを伝えてほしいと思います。

ぼくも、おっちゃんのように、一人でも多くの子どもたちにその素晴らしさを体験してもらえるように、低学年の友だちにわかりやすく教えたり、初めて来た友だちに優しく接したりしていきたい

です。

おっちゃんの思いを、国分アンビシヤス広場に通うぼくたちが、受
けついでいきたいです。

パラスポーツから学んだこと

しょうがつこうくねん おおた ちひろ
小学校六年 大田 千尋

ぼくは五年生体育の授業で初めてシッティングバレーボールを
体験しました。

シッティングバレーボールとは、床にお尻をつけた状態で行うバ
レーボールのことです。一チーム六人で、一般のバレーボールよりも
ネットを低くして、狭いコートで行います。サーブ、ブロック、スパ
イクの際に、床からお尻を浮かしてはならず、レシーブの時にだけ、
少しお尻を浮かしてもよいことになっています。

やってみると、座ってバレーボールをする難しさを感じました。
特に仲間との連けいがうまくいきませんでした。「どうしてわざわざ
ぎ座ってバレーボールをするのだろう。」と疑問に思ったので、シッ
ティングバレーボールについて詳しく調べてみることにしました。

シッティングバレーボールは1956年に始まった競技です。元々
は、戦争で脚を負傷した人が考案したそうです。それが現代でも、
体が不自由な人でも楽しめる「パラスポーツ」として普及している
と知りました。

他にもたくさんパラスポーツがあります。例えば、ブラインドサ
ッカーです。ぼくはこのブラインドサッカーをニュースで知りました。

目が見えない人たちがパスやドリブルシユートをしているのを見て、とてもおどろきました。ぼくは三年生のころからサッカーをしています。目が見えない状態でサッカーをするなど、想像するだけで難しいし、なによりこわいと思いました。ニュースを見てみると、ボールの「シヤカシヤカ」という音を頼りにプレーしていることを知、なるほどと思いました。ブラインドサッカーでは「ガイド」と呼ばれる、目が見えて、全体に指示を出す人がいます。戦術的な指示や、相手・味方の位置、ゴールまでの距離やシユートのタイミングなど、すべて声で伝えます。音と声を頼りに、目が見えない人と目が見える人が協力して行う所が、ブラインドサッカーの魅力です。更に、観客も試合を作る一員です。選手がプレーしているときは、決して声は出しません。そして、ゴールが決まった瞬間に大歓声で選手をたたえます。みんなが協力するからこそ、選手も、見ている観客も楽しいのだと思います。

ぼくは、このように、パラスポーツを知ることを通して、体が不自由かどうかに関わらず、みんなが工夫し、協力することで、みんなの権利が守られると思いました。この世界にいる全員に楽しく生きる権利があります。ブラインドサッカー会場のよう、世界中が一つになってみんなが楽しめるように協力できたら、もっともつ笑顔の人が増えると思います。

言葉は大切

しょうがつこうろくねん
小学校六年 日下部 琴美

「そうなの？意外。似合わんよ。」

これは、ある日の下校中に友達から言われた一言です。私の心にグサツと刺さりました。そして、自分に自信がなくなり、多分この友達は、アドバイスのつもりで言ってくれたのだと思います。でも、とても悲しい気持ちになりました。

言葉には人を励ましたり、喜ばせたりするものもありますが、逆に、人を簡単に傷つけてしまうものもあります。私たちは小さいころから「嘘はついてはいけない」と習いますが、本当のことをストレートに言われると傷つくときがあります。嘘をつかないことも大切かもしれませんが、友達を傷つけないことも大切だと思います。伝える時には、少し言い方を変えるだけでも、全然違うと思います。

私が幼稚園に通っていた時、隣にいた子に、「くさいよ。」と言ってしまったことがあります。あの時は、すごく悲しかったんじゃないかと、今でもずっと後悔しています。一度口から出てしまったら、戻せないのが言葉です。その時から、相手のことを考えて言葉を選ぶようになった意識するようになりました。

「言葉」・「言刃」

小学校六年 木下 つむぎ

難しくてよく悩んでしまうのが、一人ひとり、言われてうれしい言葉、悲しい言葉が違ふということです。だから私は、好きな物や趣味、がんばって作ったものなど、その人が大切にしている物は、絶対に否定しないようにしています。一人ひとり好みがあり、それを否定されると、「私はダメなのかな?」「変なのかな?」と、マイナスな考えになって、自信をなくしてしまうからです。だからこそ、話をするときは、まず相手のことを知ろうとしなければいけないと思います。

最近ではSNSなどで、だれでも簡単に、全世界に言葉を発することができてしまします。でもこれはとても危険なことだと思います。なぜなら、その言葉を受け取る相手のことが見えないからです。お互いのことをよくわからないまま、言葉だけが行き来してしまうと、トラブルにつながると思います。相手のことが見えないからこそ、想像して、注意深く言葉を選ばないといけないと思うし、それができないなら、言葉を発してはいけないと思います。

私のクラスではフワフワ言葉を増やして、「フワフワ言葉の花」がたくさん咲くように、みんなで取り組んでいます。私はこれから言葉大切にしながら、生活していきたいです。そして、世界中にフワフワ言葉の花が咲けば、みんなが笑顔で過ごせると思います。そんな世界になってほしいです。

「死ね」「うざい」「きもい」そんな言葉を、日常的に、とつきに当たり前のように使う人が私の周りにはいる。私は、なぜそんな人と人との関係をこわすような「言刃」を簡単に使ってしまうのか分からない。言葉は人と人をつなげるために生まれてきたものののに、六年生になり、「言刃」が原因となったけんかが起こった。そのけんかは、ある人の悪口を何人かがこそこそ話していて、それを聞いた人が、悪口を言われていた人に、そのことを伝えてしまったこと起こった。このけんかは、先生と一緒にその子たちと話したことで解決した。先生はその後、クラスみんなに「言葉は昔、人と人をつなげるために生まれたから、人を傷つけるために使うのは止めよう。」とおっしゃった。その言葉は、私の心に深くささった。今は、インターネットでも学校でも、心無い言葉が飛びかっいてたくさんの方の心を傷つけ、苦しめている。だから、インターネットや学校が、とても辛いもの、辛い場所になってしまっている人もいます。でも本当は、インターネットも学校も、人と人をつなぐ一つの場所として作られたものだ。

わたしは、インターネットも学校生活も、みんなが楽しく過ごせたら
しあわせだと思ふ。しかし一人一人が言葉について考えないと、みんなが
しあわせになれない。だから私は、言葉の重さと、受け取り方の
ちがひを知っておくことが大切だと思ふ。

「死ぬ」「うざい」「きもい」これらの言刃は、最近軽い言葉として
扱われてしまっていると思ふ。本当は、絶対言つてはいけない、す
るどくどくがった言刃なのに。だから、その言葉の重さについて考え、
理解することが大切だと思ふ。

言葉の受け取り方のちがひでは、人はみんな考えていることや思
つていることがちがう。だから、冗談のつもりで言つてしまったこと
が、相手は深く傷ついてしまっていることがあるのだ。そのことを知
っておくことで、一歩立ち止まり、「自分は嫌じゃないけど、他の人
は嫌かもしれないな。」という風に考えることができるのだ。

でも、どんなに気を付けていても、うっかり「言刃」を使つてしま
うことはある。言つてしまったことに気付いたら、すぐに謝ることが
大切だ。もし本人が気付いていなかったら、教えてあげることがも
大切だと思う。教え合うことで、「次から気を付けよう」と意識す
ることができるからだ。

私は、みんなと楽しく過ごせたらいいなと思ふ。だからみんなに
「言葉」は「言刃」になることを伝えていきたい。そのことをみんなが
知っていれば、みんな楽しく、幸せになれると思ふからだ。

人権作文入選作品

じんけんさくぶん
にゆうせんさく
ひん

（中学生の部）

ちゅうがくせい

ぶ

いのち 命をつなぐメッセージリレー

ちゅうがつかういちねん うえだ まお
中学校一年 上田 慎士

じぶん
自分は、スマートフォンを持つている。そのスマートフォンを使つて、
ともだち れんらく と あともだち れんらく と
友達と連絡を取り合っている。友達と連絡を取り合うだけでも楽しいが、それは命をつなぐリレーのようになる。

じぶん
自分は、中学生になつて色々な悩みをかかえるようになった。
がつこうせいかつ ゆうじんかんけい かぞく じぶん じぶん こころ
学校生活や友人関係、家族のことや自分のこと。自分の心にはた
くさんのモヤモヤがあつた。その時、救いの手になつてくれたのがス
マートフォンのメッセージだつた。自分は、友達に、

くん
「〇〇君との友人関係をやつていくのが難しくなつて…。どうし
たらいいのかな。」

なや
と悩みを言つた。すると、その悩みに友達がすぐに対応してくれて、
なや ともだち たいおう
「そしたら、まずは自分から謝つてみたら。そうしたら気まづくも
ならないから大丈夫だよ。」

やき
と優しく教えてくれた。その後、仲直りもできまし、悩みを友達に
そうだん
相談できるようにもなつた。心がすごく軽くなつた。

こんど ともだち そうだん
それからしばらくして、今度は友達から相談された。

ぼく
「僕、クラスのみんなに嫌われてるんじゃないかって思つてて…。少

ふあん
し不安なんだよね。」

きも
その気持ちがあつて分かつた。自分もそう思つたことがあるからだ。
じぶん なや かいつつ
しかし、その自分の悩みを解決してくれたのもスマートフォンだつ
た。少し考えてから自分は、

やす じかんちゅう
「そんなことないよ。だって休み時間中いつも友達と話してるで

しょ。」

「まあ、そうだけど…。」

す
「それつてつまり、みんなから好かれてる証なんじゃないかな。」
こた
と答えた。すると、友達からこんなメッセージが来た。

たし かんが
「確かに。そう考えてみるとそうかも。ありがとう。自分に自信を
も
持つて、もっと頑張つてみる。」

とき じぶん かん ひと だれ
その時、自分は感じた。人は誰にだつて、助けて、助けられる権利
も
を持つている。人は一人だけじゃ生きていけないけど、誰かと支え
あ
合つて生きていくことが分かつた。こうやって、「ありがとう」や

かんば
「頑張れ」などののはげましの言葉で助けられ、その助けられた人が
こんど ひと たす
今度は人を助けるようになる。それを何度もくり返して、くり返
して、くり返していくとリレーのようになってるのを。

じぶん ひと なや こた
それから自分は、人の悩みに答えられるようになった。
わたし えいご ぶんしょう たんこ にがて
「私、英語の文章と単語が苦手で、どうしたらいいかな。」

いっ べんきょう
「そしたら、一しよに勉強しよう。そうしたら絶対苦手をく服で
きるよ。」

「僕、なかなか足が速くならなくて、どうやったらそんなに速く走れるの。」

「まずは、ここはこうして、こうすると速くなるよ。」

色々な人の悩みを聞いていくうちに自分は、

「ありがとう！」

と言われるようになった。自分はふと思いだした。自分は、五年生の時、「ありがとう」をテーマに短い作文を書いたことがある。その作文がラジオで放送された時もあった。いま思い出しても、「やっぱりすてきな。」と思う。自分の感謝の気持ちをありのまま伝えられるところがある。そして、それは手話でも英語でも、フランス語でも伝えられる。そんな魔法のような言葉が自分は大好きだ。

自分は、困っている人を助けられて、すごく嬉しかった。今でも自分は、色々な悩みをかかえているけど相談をして、すっきりしている。まだまだ、悩みをかかえている人はたくさんいるから、自分の言葉のキャッチボールリレーをつなげていきたい。いろいろな人を助けていくようなヒーローになりたい。僕はこのことを大人まで続けていって、人を助けたい。

言葉は見えない刃物

中学校一年 江上 里桜

言葉は目に見えない力を持っています。その一言で、人の心に影響を与え、使い方を間違えると厄介な凶器になります。あなたは、「言葉」をどのように使いますか？

私は正直「バカ」や「キモイ」という言葉を使っていました。友達の間で、冗談でキモイとバカにして、笑ってみんな楽しんでいて、私も思っていました。でも、あることをきっかけに考え方が変わるようになりました。それは図工の時間のことです。作品を作っている時に、「それ変じゃない？」と言われたのです。その言葉を聞いたとき、もう何も考えられなくなると同時に、「なんでそんなこと言うの」という怒りや悲しみの二つが心の中にありました。自分のことを否定されたような気がして、一瞬でいやな気持ちになりました。

この経験から、私が軽い冗談で言ったことが、実は友達にいやな思いをさせ、傷つけていたことに気づき、最低なことをしたと反省の気持ちでいっぱいになりました。人を傷つける言葉は使ってはいけないうとこれまで沢山教わってきたのに、いつの間にかバカにして笑

つて、相手のことを考えずにいたことを後悔しました。一方的な考え方は、どんなに仲の良い友達だとしても、言っていないことと悪いこと、やっていいことと悪いことの判断を間違えると「言葉の凶器」になってしまふ。そう気づかされました。

それは、家族やSNSでも同じことが言えると思います。家族は毎日一緒にいて、仲直りもしやすいです。しかし友達とは違うから何を言ってもいいというわけではありません。どんなに親密な関係であっても、言いたいことをすべて発してしまうことは、知らず知らずのうちに相手の人権を否定することにもつながりかねないのです。SNSも同様です。動画や写真を本人の許可なく投稿する。その投稿に対して何も関係ない人からコメントがくる。自分たちの知らないところで言い合いになる。こうやってどこかの他人を追いつめることになるのです。誤った言葉を使っていることに気づき、コメントを削除して画面から消えたとしても、相手の心には一生残ります。さらに、書き込みや誹謗中傷によって亡くなる方もいて、手遅れになる場合もあります。言葉は人の人生を変えることができます、それだけ怖いものなのです。

ポジティブな言葉は人々を励まし、幸福感を与えてくれます。しかし、ネガティブな言葉は心に傷を残します。言葉のすれ違いで一生の友達を失うこともあります。一度すれ違ったら二度と会えなくなるかもしれません。言葉は時として凶器になる。ナイフなん

て比にならないくらい、重く、鋭く、心をえぐってきます。他人と同調するより他人をけなすより、まずは自分を律して磨いていくことが大切なのではないかと思っています。不用意な発言で、身に覚えのない汚名を着せられ、本人が家族が友人が傷つけられるかもしれません。自分の言葉に自分の行動一つ一つに責任をもって、これからの日々を過ごしていきたいです。

日々の生活

ちゅうがっこうにねん　しのぎき
中学校二年　篠崎　理心

突然の怪我。突然……。誰も未来を予測することはできない。何気なく過ごしている日々。同じ日なんて一度もない

私の父は、毎日バイクで通勤している。朝早くから夜遅くまで働いている。そんなある夜、バイクで事故を起こしてしまう。父は事故で右の鎖骨を折ってしまった。それから私たちの日々の生活の仕方が変わった。

想像もしなかった、考えたこともなかった突然の出来事であった。今の父は、着替えること、洗顔、そして食事することが一人では難しい。たくさん困っていることがある。家で困っていたら、家族みんなでサポートしている。仕事の通勤では、公共交通機関である電車を使っている。そこでも問題が発生した。席が空いていないとき、右手が上げられないため、つりかわを持てない。右からくる人とぶつかりそうで怖い、と思って自分で行きかしてしまふ。知らない人ばかりだから頼ることもできない。

思ってもいないところでの生活の変化は慣れるまでに時間、体力もかかることは間違いない。

私がこの機会に考えたことは「困っている人に対し、人はどれだけ気付くことができ、また、サポートできるのか。」ということだ。そのようなことを意識して周囲を見ると自然と手助けができる人の姿はとても美しいと感じた。さらに自然で、なおかつ素早く行動することが大事だと思った。電車で席からスツと立ちあがり、「どうぞ」とゆずれる人。わざわざ大げさにアピールする必要はない。自然にできることである。私は、これこそが人権の「輪」につながると思った。

私の身の周りで起きたことを機会に何が大事なのかを考えることができた。そして、父の怪我はすべて、無駄にはなっていない、意味があるものだとなかった。早く父の鎖骨も良くなり、元の生活に戻ることを望んでいる。しかし、今回のことを体感できたことにも感謝をしている。

住みやすい世の中とは、自然に人を思いやることが出来る世の中だと思った。そして、普段「いただきます」とご飯を食べることで、「いただきます」と学校へ行くことは、すべてあたりまえではないと知った。だから、一日一日に感謝して、過ごしていきたい。

障がいをもっている人もみんな同じ人間

ちゅうがっこうにねん かわぐち りあ
中学校二年 川口 莉愛

皆さんは、障がい者についての人権問題を考えたことはありますか。昔から、職場や学校などで嫌がらせやいじめを受けることが問題になっているとされています。

私はふと思いました。「なぜ、障がい者と健常者が違う人間だと思ふのだろう」と。私の弟は、小学2年生です。言葉があまり話せない障がいをもっています。言っていることの大体は分かるけど、「ありがとう」「や」「ごめんね」「ママ」「や」「ぽぽ」「すき」「や」「いや」などをゆっくり、かたことではか話せません。だけど私は弟のことが大好きです。私は弟と妹合わせて3人いて私が一番年上です。お父さん、お母さんが私達を愛してくれて、大切にしてくれているように、私も弟や妹のことが大好きだし、大切な兄弟だと思っています。よく他の子たちに障がいをかくしたりする人もいると思います。でも私はわざわざ自分から言うことはありませんが、弟と会う機会があればすべてにかくさずに言うことにしています。私はめぐまれている、今まであった友達に否定されたことはありません。世の中には耳の不自由、足の不自由などがありますが

そのことで否定する人はたくさんいます。その中で受け入れてくれる人もいるといううれしさの実感は身近に障がい者がいるから分かる思いだ。この身に感じています。弟は今、支援学校に通っていて、学校の後は放課後デイサービスに行っています。毎日会っているから分からないけど、ときどきはじめて話す言葉だったり、前ははつきり言えなかった言葉がはつきり言えるようになったり、絵が上手になったり。そのたびに、たくさん頑張ったんだねってすごく思います。私の弟のまわりの人たちはいい人たちで、嫌がらせやいじめは受けておらず、毎日楽しそうにしています。でも、世の中にはどこかに嫌がらせやいじめをしている人たちはいます。なぜ世の中には頑張っている人に嫌がらせやいじめをしているか見当つきません。こんなに必死になって頑張っているのにそれを否定する人が信じられません。障がいがあってもみんなと同じ人間なのだと思います。

私は身近に障がいをもっている弟がいるからこそ嫌がらせやいじめをなくしていきたいです。でも中学生の私はまだ無力です。だからまずは知ってもらおう、理解してもらおうということをゴールにしてこつこつと小さなことから積み重ねて、少しでも多くの人の心を変えていきたいと思い、この人権作文にかきました。これを読んだくれた人たちにこの思いが伝わることを願っています。

多様性

ちゅうがっこうさんねん ひらかわ ちず
中学校三年 平川 千珠

友人から一件のメッセージが送られてきた。

「私ね、恋のキューピッドになったよ。」

文面から心底嬉しそうなのが伝わってきた。どうしたのと話をきくと、気になっている女の子がいる、という女の子の相談にのってあげたらしい。私は「よかったね。」といった。

最近「ジェンダーレス」や「同性愛」についてのニュースや記事を見かけるようになった。他にもアンケートに回答するとき、性別の欄に男性、女性の他にそれ以外という選択肢ができ、学校の制服のスカートとズボンを自由に選べるようになった。また同性同士の恋愛を描いた物語をよく見かけるようになった。

このようにジェンダーレスの考え方が世の中に浸透していつているのは実感していたけれど、身近に感じたことはなかったので私自身も嬉しかった。

母にその友達の話伝えると、

「えーそうなんだ。すごいね。」

と言われた。割とあっさりと答えたので、同性愛についてあまり

抵抗がないんだなと思った。

今回の作文をかくにあたって母とジェンダーについての話をしたとき、母はその友達の話を持ちだした。

「あのとき何も言わなかったけど、本当はとても衝撃的だったよ。だけど、あなたが当たり前のように話すから、受け入れられないとい

けないなと思った。」

私にとっては母の「受け入れないといけない」という言葉が衝撃的だった。ジェンダーレスを否定する意見はもちろん知っているけど、否定しない意見は全て賛成だと錯覚していたことに気付いた。それこそ、多様性のない考えである。

母は私に「お父さんに話してないの」と尋ねた。私が頷くと母は「どうして」と言った。別に話したくなかったわけでも、話すのをためらったわけでもなかった。だけど、もし父に話をして「きつと理解してもらえないだろう。」と無意識に思っている自分に気付いた。そのとき私はハッとした。身近に居て嬉しいことも、母は抵抗がないんだなと思ったことも、父には理解してもらえないと思いいこんでるのも、ジェンダーレスがマイノリティだと考えているからこそ出てくる考えで、私は受け入れている「つもり」ただけなのだと。私は自分が「つもり」であつたことへのショックと同時に、自分と違うことを受け入れる難しさを知った。

何か新しいことに挑戦するとき、自分と異なる部分があつたと

き、多少なりとも違和感が生まれる。それは実は不安や心配から
来ているのだと思う。理解しているつもりでも、本当は心のどこか
で不安や心配が残っていたり、時にはそれが大きくなって批判的に
なってしまうこともある。しかしそれを無理に押し殺すの
ではなく、その違和感さえも“多様性”として受け止め、全てを
一気に受け入れようとしなくても大切だと思った。私は今まで
自分だけの多様性をもつのが怖くて分かったフリをしていた。でも、
十人十色だからこそ社会は明るくなるのだと思う。否定派の人、
賛成派の人、どちらでもある人、どちらでもない人。私たちが立て
る立場は無量大である。様々な考えがあつて様々な視点から見
その積み重ねが明るい社会につながっていくのだ。
だから私はその第一歩として、父に友達の話をすることを決
めた。